

日本語と韓国語の強意語の修飾様相 ——形容詞との共起関係を中心に——

金 賢珍

1. はじめに

どの言語にも主張の内容を強調する強意表現がある。日本語や韓国語も例外ではない。両言語の強意表現は語形式、句形式、節形式など多様な形で表れる。本稿では、主に語形式のものを強意語と称してその副詞的修飾機能の様相を考察する。修飾語としての強意語と修飾される対象としての被修飾語の間には意味的であれ形式的であれ一定の共起関係が存在し、両者は互いに密接に関連づけられる。強意語の性質・実態を把握する上で、修飾語と被修飾語との間に存在する選択制限の観点から考察することはきわめて重要なことであると考えられる。

強意語の修飾対象は多様な品詞にまたがっているが、中でも従来から強意語の修飾対象としてよく取り上げられるのは以下の例のような形容詞である。

- (1)a. 私はとても嬉しい。(=나는 아주 기쁘다.)
- b. 今日は本当に暑い。(=오늘은 정말 덥다.)
- c. これがもっと大きい。(=이것이 더 크다.)
- d. 最も重要な問題だ。(=가장 중요한 문제다.)
- e. 極めて残念なことだ。(=매우 유감스러운 일이다.)

(1a)の「嬉しさ」と(1b)の「暑さ」は人の感情、感覚を表し、(1c)の「大きさ」、(1d)の「重要さ」、(1e)の「残念であること」は物事の性質・状態を表して、それぞれの程度を各強意語で強調している。本稿では、このように日本語と韓国語の強意語と共起する形容詞に焦点を当てて、その統語的な共起関係の観点からそれぞれの強意語の意味的特徴を検討する。

2. 先行研究及び本稿の分析方法

強意語とその被修飾語の間に緊密な関係が存在するのにも拘らず、従来の研究で被修飾語との関係を本格的に取り上げて強意語を説明したものはあまり見当たらない。強いて言えば、日本語に関しては狭義の強意語、つまり程度副詞の名詞修飾（丹保 1979、佐野 1997）、動詞修飾（丹保 1975、森山 1985）に関する記述があり、韓国語に関しては、李忠雨（1986）、최홍렬（2005）などによる程度副詞の類義語研究において強意語が多様な品詞と結びつく可能性を概略的に示している程度である。本稿で考察対象とする形容詞に関しても、日韓両言語とも強意語と共起可能であるのは「程度性」を持つ形容詞に限られる、というように強意語と形容詞の共起関係の可否だけを示しているのがほとんどである。確かに、強意語と共起するためには、被修飾語にはまず「程度性」が要求されるであろうが、このような説明は強意語と被修飾語の関係において循環論になるだけであると思われる。

本稿では、西尾（1972）の程度副詞と共起可能な形容詞のタイプを踏まえつつ、その強意語の使い方を意味的な側面から捉えることを目的とし、形容詞の意味と強意語の共起関係に焦点を当てて考察を試みる。形容詞は、西尾（1972）の「主観的な感覚・感情をなすもの」と「客観的な性質・状態の表現をなすもの」の分類に基づき、(1a)の「感情形容詞」、(1b)の「感覚形容詞」、(1c)～(1e)の「属性形容詞」に分けて、強意語との共起関係を検討する。そのような検討を通じて、日韓両言語の強意語の対応関係においてよりの確に共通点と相違点を示すことができるのではないかと考えられる。

3. 調査対象とする強意語の選定と言語資料

3.1 調査対象とする強意語の範囲

強意語と形容詞の共起関係を説明するために、まず強意語と呼ばれる語の範囲を定める必要がある。本稿で考察対象とする強意語は、主張内容に対して質的には影響を与えず程度的(量的)に強化したり弱化したりする語の類である。そして、従来の研究の中で最も包括的に強意語の範囲を規定していると見られる工藤（1983）を参考にして、程度性を高めるという中心的な働きをするものから周辺の・派生的な機能のものにまで対象を広げて考えることにする。それぞれの強意語の意味特徴から「大小の程度」、「比較の程度」、「確実の程度」、「概略の程度」、「否定の程度」の5つの意味領域に分けて考える。そして、この5つの意味特徴が被修飾語の形容詞とどのように係わるかについて検討する。この

ような日韓両言語の強意語の意味的特徴の区分は恣意的・主観的な側面も強いことは否めないが、強意語の類義関係及び相違関係を把握する上で一つの重要な手がかりになると考えられる。

3.2 言語資料

3.1 で定義した強意語は、程度性以外の意味役割は単純であるため、それぞれの語の性質を客観的に捉えにくい。これが各強意語の実態を把握することを困難にしている一因にもなっていると考えられる。この問題を解決するためには、包括的な共起関係が分かるように被修飾語を幅広く扱う必要がある。そこで、本稿ではできるだけ多くの用例を収集し、そこに見られる傾向を判断基準にする。そのため、調査資料として小説、随筆、シナリオ、童話、新聞記事を用いることとし、話し言葉と書き言葉の両面から収集した。本稿で用いた調査資料は次の通りである。

小説： 日本語と韓国語のもの各 5 冊
 随筆： 日本語と韓国語のもの各 5 冊
 台本： 日本語の映画台本 5 編 韓国語のドラマ台本 2 編
 童話： 日本語のもの 22 話 韓国語のもの 60 話
 新聞： 日本語と韓国語の新聞（2006 年 1 月～12 月）の社説

3.3 調査資料に見られる強意語と形容詞

ここでは調査資料から収集された用例に基づき、その共起現象が見られた強意語と形容詞の共起の様相を概観する。

3.3.1 調査資料に見られる強意語

調査資料から強意語を拾い出し、意味領域別に出現した強意語を異なり語数¹で示すと表 1 の通りである。括弧内の数字は形容詞と共起する強意語の語数を表す。

表 1：日本語と韓国語の強意語の異なり語数

	大小の程度	比較の程度	確実さの程度	概略の程度	否定の程度
日本語	86 (55)	35 (31)	9 (8)	8 (7)	20 (9)
韓国語	120 (73)	34 (23)	16 (9)	7 (2)	15 (10)

この調査結果によれば、5つの意味領域で全部共起現象が見られるが、語に

よっては形容詞と共起できないものもある。² 強意語のうち、形容詞と共起する用例の最も多いものは以下の通りである。

日本語：① もっと、② 本当に、③ 一番、④ あまり、⑤ とても、
⑥ ほとんど、⑦ 少し、⑧ 最も、⑨ 極めて、⑩ あんまり

韓国語：① 더(もっと)、② 너무(あまりに)、③ 참(実に)、④ 정말(本当に)、
⑤ 좀(少し、ちょっと)、⑥ 아주(とても)、⑦ 가장(最も)、
⑧ 얼마나(どんなに)、⑨ 다(すべて)、⑩ 아무리(どんなに、いくら)

3.3.2 強意語と共起する形容詞

調査資料から得られた強意語と共起する語を品詞の観点から見ると、その用例数の分布は表2の通りである。

表2：強意語と共起する語の品詞別用例数分布

	動詞	形容詞	名詞	副詞	その他	合計
日本語	4,135	2,005	902	135	398	7,575
韓国語	5,144	3,247	708	644	489	10,232

このような用例数分布は、どのような強意語を調査対象とするかによって大きく変化すると思われるが、本稿の包括的な調査では、強意語と最も頻繁に共起関係を結んでいるのは動詞、形容詞、名詞の順であった。そのうち、強意語が形容詞と共起する用例数は、日本語が 2,005 例、韓国語が 3,247 例で、用例総数の 30%前後を占めている。また、強意語と共起する形容詞の異なり語数で見ると、日本語が 576 語、韓国語が 707 語であった。このうち、用例数の多い形容詞上位 10 位までを挙げると次のようになる。

日本語：① ない、② いい、③ 大きい、④ 強い、⑤ 高い、⑥ 悪い、
⑦ ひどい、⑧ 好きだ、⑨ 同じだ、⑩ 長い

韓国語：① 좋다(いい)、② 크다(大きい)、③ 없다(ない)、④ 많다(多い)、
⑤ 있다(ある)³、⑥ 힘들다(大変だ)、⑦ 아프다(痛い)、⑧ 이상하다(変だ・おかしい)、⑨ 행복하다(幸せだ)、⑩ 중요하다(重要だ)

これらを見ると、「大きい、多い、強い、高い、長い、ない」は物事の物理的な

性質・状態を表す群であり、「いい、好きだ、ひどい、大変だ、おかしい、幸せだ、重要だ」は物事に対して様子・評価などを表す群である。いずれも物事の性質・状態の表現をなす属性形容詞である。韓国語の「아프다」(痛い)という語を除いて、感情・感覚を表す語は見られない。このことから、強意語は感情・感覚を表す語より物事の属性に係わる語と共起しやすいと考えられる。以下では、本稿の考察対象とする強意語が具体的にどのような性質を持つ形容詞と共起するかを見るため、西尾（1972）の分類を参考にして形容詞を次のように区分し、形容詞の区分ごとに強意語との共起関係を検討する。

- A. 感情形容詞：「感情主」を主語にとって、感情を直接に表す語
- B. 感覚形容詞：「感情主」の体の全体と一部分の感覚を表す語
 - a. 《温度感覚》 b. 《体感覚》
- C. 属性形容詞：「コト・モノ」の性質・状態を表す語
 - a. 《コト・モノの物理的側面》
 - b. 《コト・モノに対する程度・評価》
 - c. 《コト・モノに対する感情》

4. 強意語と形容詞の共起関係

4.1 強意語の分類

第3章で強意語を5つの意味領域に区分したが、意味内容に従ってこれをさらに次のように下位区分し⁴、形容詞との共起の様相を検討することにする。

	下位区分	強意語
大小	とても類	① とても、とっても、非常に、大変、いかに、いかにも、すごく、ものすごく、ひどく、いくら、すっかり、大層、あまり、あんまり、あまりに、めちゃくちゃ ② まったく、まるで、全然、まるっきり
	아주類	① 아주, 가뜰이나, 굉장히, 대단히, 더없이, 매우, 무척, 무척이나, 몹시, 몹시도, 너무, 너무나, 무지, 무지무지, 아무리, 얼마나, 하도, 워낙, 워낙에, 많이, 열라, 짱, 끝없이, 사뭇, 되게, 어찌, 어찌나, 엄청, 엄청나게, 여간 ② 펍, 펍도, 펍이나, 그지없이, 턱없이, 터무니없이, 한없이, 심히, 썩, 생판, 무수히, 수없이,
	きわめて類	きわめて、ごく、しごく、すこぶる、いたく、極端に、いたって、いとも、甚だ
	극히類	극히, 극도로, 심히, 턱없이, 터무니없이, 지극히, 완전, 완전히, 지독하게, 그지없이

	かなり類	かなり、結構、随分、相当、多分に、だいぶ、なかなか
	상당히類	상당히, 제법, 꽤, 꽤나, 적당히, 충분히, 자못, 다분히, 어지간히
	少し類	① 少し、ちょっと、ちょいと、僅かに、少々、やや、いささか、幾分、ほんの ② 多少、多少なりとも
	조금類	① 조금, 약간, 좀, 쪼끔, 쪼금 ② 다소
	大いに類	大いに、うんと、たくさん、多く、みんな、全部、すべて
	다類	다, 모두, 온통, 전부, 죄다,
比較	最も類	最も、一番、何より
	가장類	가장, 제일, 짚, 최고로
	だんだん類	だんだん、どんどん、ますます、いよいよ、次第に、日増しに
	점점類	점점, 갈수록, 나날이
	もっと類	① 一層、より一層、ことさら、ことさらに、ずっと、割と、めっきり、案外と、とりわけ、なお、はるかに、別に、もっと、よっぽど、よほど、より、意外と、意外に、とくに、一段と、ひときわ ② ことに、ことにも、別段、格段に
	더類	① 더, 더욱, 더더욱, 더욱더, 덜 ② 보다, 의외로, 좀더, 유난히, 유달리, 훨씬, 한층, 특별히, 한결, 유독, 유난스레
確実	確かに類	確かに、まさに
	분명히類	분명히, 틀림없이
	本当に類	本当(に)、まことに、実に、ほんま、ほんと(に)、ほんに、
	정말類	정말, 정말로, 참, 참으로, 정히, 진짜, 진짜로, 참말, 참말로, 진실로
概略	ほとんど類	ほとんど、ほぼ、およそ、大抵、大体、概ね、大概
	거의類	거의, 대체로
否定	一向類	一向、全く、少しも、全然、微塵も、ひとつも、ちっとも、まったく
	전혀類	전혀, 도무지, 영, 조금도, 하나도
	さほど類	さほど、あまり、あんまり
	별로類	별로, 그다지, 그리, 과히

4.2 強意語と感情形容詞の共起関係

「嬉しい、悲しい、悔しい、恥ずかしい、つらい」などの感情形容詞は、人の「快・不快・喜び・怒り・悲しみ」など人の心の状態を表すものであるため、目に見える実体もなく何か外的な基準でその程度を測り得るものでもない。感情主の主観的な判断によるしかないものである。このような性質をもつ感情形容詞と強意語との共起に関して、調査資料から次のような結果が得られた。Aグループの類は感情形容詞とよく共起するもので、Bグループの類は調査資料には共起例がほとんど見られないものである。

A：とても類①／아주類①、少し類①／조금類①、かなり類、

- 最も類／가장類、本当に類／정말類、더類①
 B：きわめて類／극히類、大いに類／다類、確かに類／분명히類、
 ほとんど類／거의類、だんだん類／점점類、もっと類／더類②、
 一向類／전혀類、さほど類／별로類、とても類②／아주類②、
 少し類②／조금類②、상당히類

人の感情の大きさに対して、感情程度の大は《とても類①／아주類①》で、感情程度の小は《少し類①／조금類》で多く言い表されている。

- お母さんお母さんと甘えてくれるのがとてもうれしかった。⁵
 ○「ごめん。気持ちはすごくうれしいんだけど、ぼくは結局修復士が性にあっている。～」
 ○そんな元気な福永光司さんが亡くなられて、二年がたつ。ひどくさびしい。
 ○아주 슬펐어요. 슬플 때마다 나는 잠을 자려고 노력합니다.
 (とても悲しかったです。悲しくなるたびに私は寝ます。)
 ○“오늘 나 만나러 와줘서 너무 기뻐어요.”
 (今日、会いに来てくれてとても嬉しかったです。)

- 芽実が見つめている未来を一緒に覗くのは少し怖かった。
 ○「だが、オレは昔のように怒ったほうがなつかしいね。いまは、ちょっとさびしいよ」
 ○소녀처럼 나도 춥다고 생각하니 조금 기뻐합니다.
 (娘のように私も寒いと思ったので少しは嬉しかったです。)

これらはいずれも話者自身の感情の程度を表すものであり、程度の大小は外的な客観的基準によるものではなく、話者自身の内省によるものである。また、このように主観的に感情程度の大をよく表すのに《本当に類／정말類》がよく用いられている。

- 「本当に悔しくてなりません。僕らはいくら会いたくても留置場の被疑者には会えませんから」
 ○〔北ホテル〕の隣りにある小さなレストランの二階から、運河をわたる荷船をながめるのは、まことにたのしい。
 ○“괜찮아……오늘 만나서 잘 기뻐다.” (大丈夫よ……今日会えて本当に嬉しかった。)
 ○오빠는 진정 괴로운 듯 말했다. (お兄さんは本当に苦しそうに言った。)

《本当に類／정말類》は本来事柄の确实さを表すものだが、話者の気持ちが如何に确实性の高い真実であるかを言い表すことで感情程度を高める効果が生じ

ると言えよう。

次の《最も類／가장類》は、同類の感情が判断基準になって、その中で一番程度大であることを言い表すものである。しかし、判断基準があるにもかかわらず、話者の内部経験の主観的な感情基準であるため、客観的な観点からだとは言いにくい。

- そして、ボクがオトンと一緒にいて一番楽しかった時間で、一番うれしかった時間だった。
- ならば「武士道精神に照らし合わせれば、これはもっとも恥ずかしい、卑怯なこと」(藤原氏)だった日中戦争に、いまだにけじめがつかないのでは話にならない。
- “나를 가장 슬프게 하는 것은 아빠에게 애인이 생겼을 때”라고 써 놓은 것을 보았다. (“私を最も悲しくするのは父に恋人ができたとき”と書いておいたものを見た。)
- 남의 옷만 지어 주고 살아온 여인, 신부 옷을 짓는 게 제일 기쁘다고.
(人の服ばかり作ってきた女、花嫁の服を作ることが一番嬉しいって。)

他に、日本語では《かなり類》で感情の大きさが表される。

- これは大人でも、かなり苦しいプレイらしい。
- でも当人達には結構つらい日々でした。
- 「お前はよだかだな。なるほど、ずいぶんつらкаろう。～」
- Aさんの恐ろしさにも慣れて、だいぶ楽しかった様子のWがそんな話で～。

これらの例では、話者自身ではなく他者の感じる「苦しさ、つらさ、楽しさ」を話者が代わりに述べ、その程度を「かなり」「結構」「ずいぶん」「だいぶ」で表現している。つまり、上に示した他の強意語とは異なり他者を対象化して間接的に感じられる感情の程度を表しているものである。しかし、《かなり類》に対応する韓国語の《상당히類》では他人の感情の程度を表す例は見当たらない。

《더類①》は、判断基準がはっきりしていてその基準よりは感情程度が大きいことを表す。その意味で、他の強意語よりは程度の大きさが捉えやすくなり客観性も高まると考えられる。

- 봄이 되어 외투를 벗는다는 것은 더 기쁜 일이다.

(春になって外套を脱ぐというのはもっと嬉しいことだ。)

○난 아주 나쁜 아이입니다. 슬픈 아빠를 더 슬프게 만든 나쁜 아들 말입니다.

(私はとても悪い子です。悲しんでいる父をもっと悲しませる悪い息子です。)

4.3 強意語と感覚形容詞の共起関係

体の状態から生じる痛みなどの「体感覚」や外部の温度変化を感じる「温度感覚」などを表す感覚形容詞と強意語との共起する様子は次の通りである。上と同様、Aは感覚形容詞とよく共起しているもので、Bは本稿の調査資料において共起例がほとんど見られないものである(以下同じ)。

A : とても類①／아주類①、少し類①／조금類①、本当に類／정말類、かなり類／상당히類、더類①

B : きわめて類／극히類、大いに類／다類、確かに類／분명히類、ほとんど類／거의類、最も類／가장類、だんだん類／점점類、もっと類／더類②、一向類／전혀類、さほど類／별로類、とても類②／아주類②

強意語と感覚形容詞の共起関係は感情形容詞の場合と大きく変わらない。まず、温度感覚で見ると、《とても類①／아주類①》と《少し類①／조금類①》でその程度の大小を示している。

○翌朝は快晴だった。ひどく暑い一日になるのがベッドのなかですでにわかった。

○「これはね、外がひじょうに寒いだろう。室のなかがあんまり暖かいとひびがきれるから、その予防なんだ。～」

○「ねえ……、ちょっと暑いんですけど。」

○지금은 너무 더워요. 장마가 끝나고 태풍도 물러갔어요.

(今は暑すぎます。梅雨が上がって台風も去りました。)

○밤바람이 약간 쌀쌀했습니다. (夜風がちょっと肌寒いです。)

これらの例の温度感覚の程度は、外部基準に基づいて測定した客観的なものではなく、話者自身の内部基準によって主観的に判断された程度である。つまり、外的な気温の状態を話者の内側の心情として表現しているものである。そのため、話者の主観的な面が影響しやすくなり、その程度の強弱を《とても類①／아주類①》で表していると考えられる。

一方、《かなり類／상당히類》では、同様の温度に関しても、下の用例からも

見られるように外部の様子を説明し、情報伝達として客観的に描写する性格が強いと考えられる。

○「ふん。バースレーかね。黒狐だよ。なかなか寒いからね、おい、君、若いお方、失敬だが外套を一枚お貸申すとしようじゃないか。～」

○～ 기온이 낮에는 쾌적하다가도 밤에는 뚝 떨어져 꽤 추웠다.

(～、気温が昼には快適だったが夜にはぐんと気温が下がってかなり寒かった。)

○3월이 다가오는데도 새벽녘에 눈이 와 바람이 제법 쌀쌀했다.

(3月に近づいているというのに、明け方に雪が降ってかなり寒かった。)

「気温」「風」の状態の判断は客観化することが可能であり、《かなり類／상당히類》で規定する場合はある程度客観化された判断であると言えよう。このように、同じ外部の温度感覚でも、話者の内部感覚でとるか外部の客観的状态としてとるかによって強意語の使い方に影響すると考えられる。

「痛さ」のような体感覚に関しては、《とても類①／아주類①》または《少し類①／조금類①》でその程度を強めている。「痛さ」というものは、直接感じる本人以外にはその程度を分りきれないものである。その意味で温度感覚より主観的な性質が強いとも言えよう。

○どういふわけか非常に腹が痛くて、のどのところへちくちく刺さるものがある。

○少々痛かったが、そのまま三輪車で帰れる程度の打撲だった。

○문제는 수술 다음부터겠죠. 무지무지 아프고 힘들다는 소리를 들었어요.

(問題は手術後からでしょう。ものすごく痛くて大変だということを聞きました。)

○“실은 조 아프거든…아니, 솔직히 말해 많이 아프거든, 물핀을 맞아도 많이 아파.” (実はちょっと痛いので…いや、正直すごく痛むんだよ、モールピンを打ってもらってもすごく痛いのだ。)

4.4 強意語と属性形容詞の共起関係

強意語と共起する属性形容詞をコト・モノの物理的側面、コト・モノに対する程度・評価、コト・モノに対する感情の場合に分けて検討する。

(1) コト・モノの物理的側面

物理的側面としたのは、高低、遠近、大小、濃淡、強弱といった物事の属性や性質を表すものである。これらは相対的な反義関係の対をなしているものが多く、数値化が可能でより客観的であると考えられるものである。反面、これ

らの程度に対する認識の個人差が大きいため、その客観性が低くなることもある。つまり、物理的側面に関する判断は客観性と主観性を同時に持っていると言える。これらの度合いを強めるためには、感情・感覚の場合より多様な強意語が使用されている。

- A : とても類①／아주類①、きわめて類／극히類、かなり類／상당히類、
少し類／조금類、最も類／가장類、だんだん類／점점類、もっと類／더類、
本当に類／정말類、さほど類／별로類
B : 大いに類／다類、確かに類／분명히類、ほとんど類／거의類、
一向類／전혀類

感情・感覚の程度を最もよく表した《とても類①／아주類①》は物事の物理的な側面でも多く用いられる。次の例では「体・空間の大きさ」「時間の長さ」などの程度が大きいことを《とても類①／아주類①》で表している。

○マーヴは体がとても大きい。

○내가 아주 큰 도시에 있다가 산골 학교로 온 것은 금년 3 월이었습니

(私がとても大都会に住んでいて山のなかにある学校に来たのは今年3月でした。)

○‘드래곤 볼’을 모두 읽으려면 42 일이 걸릴 겁니다. 42 일은 굉장히 긴 시간입니
다. (‘ドラゴンボール’を全部読むには 42 日間はかかるでしょう。42 日間は大変
長い時間です。)

これらは外部基準による程度の判断というより話者内部にある暗黙の基準によって判断された「物・体の大きさ、時間の長さ」の程度である。以下の《少し類／조금類》《本当に類／정말類》にも同様のことが言えよう。

○秋らしく気温の低い曇り日で、そういう日にはいつもそうであるように、漆喰と煉瓦のクーポラが、普段よりもやや大きくみえた。

○豚は実に永い間、変な顔して、眺めていたが、とうとう頭がくらくらして、いやいやな気分になった。

○조금 큰 곰이 문을 더욱 세게 두드렸어요.

(少し大きい熊がドアをさらに強く叩きました。)

○“(!)손이 참 크구나. 이렇게 클 때까지 몰랐네.”

(手が本当に大きいね。こんなに大きくなるまで知らなかったね。)

反面、感情・感覚の程度は表しにくい《極めて類》は物事の物理的側面の程

度に関しては共起関係が見られる。韓国語の《극히類》も物理的側面の程度に関しては例がほとんどなく、上で見たようにその程度が大きいことは主に《아주類》で表現している。日本語の《極めて類》には下のような例が挙げられる。

- 竜巻の恐ろしさは、局地的ではあってもきわめて強い風が吹くことにある。
- ダニエラのレオタードは黒で、私のレオタードはごくうすいピンクだった。
- ～、作品の数は極端に少なく、後は個人の所蔵か或いは教会の所蔵ということになる。

上の《きわめて類》の用例を見ると、漠然とした大きさを表しているのではない。「風の強さ」「色の濃淡」「作品の数」に対する判断根拠を外部の「竜巻の強さ」「他の作品との比較」「他の所蔵品数との比較」に持っている。《とても類／아주類》と異なり外部に現れる状況からその程度をより客観的に判断した結果とも言えよう。

物理的側面を表す形容詞とよく共起するものには、他に《かなり類／상당히類》、比較の意味領域の《最も類／가장類》《だんだん類／점점類》《もっと類／더類》がある。

- 萌葱色のスーツを着た女校長が、壇上でずいぶん長い挨拶をしている。
- あの狼の下げて来た靱が芽を出してだんだん大きくなったのだ。
- 세상에서 제일 넓은 바다가 태평양이고, 제일 높은 산이 에베레스트인 것처럼요.
(世の中で最も広い海は太平洋で、最も高い山はエベレストのようですね。)
- 누워서 보는 세상은 서서 보는 것보다 훨씬 넓다.
(横になってみる世の中は立ってみる世の中よりずっと広い。)

(2)コト・モノに対する程度・評価

コト・モノに対してその程度・評価を表す場合は、コト・モノの多様な側面を表現する。コト・モノの外面の様子、内面の状態といった性質や特性を表す場合もあり、また、コト・モノに対するプラス評価かマイナス評価かを下す場合もある。このようなコト・モノに対する程度・評価に関わる形容詞は、本稿で考察対象としているほとんどすべての強意語と共起でき共起上の制約は見られない。

「外面の様子」

- 順正は、デリケートな、とてもきれいな几帳面な文字を書く。
- 十畳ほどのワンルームで、外観に比べて設備はずいぶん古めかしく、しかしそんなことよりも、その部屋は鳥肌が立つほど汚れていた。
- “엄마, 이 다음에 내가 어른이 되면 엄마 그림을 아주 예쁘게 그려 줄게요.”
(お母さん、将来私が大人になったらお母さんの絵をとてもきれいに描いてあげます。)
- ‘서울은 참 좋다아! 꽃아도 달아나지 않는 비둘기도 많고…….’
(ソウルは本当にいいね! 追い払っても逃げない鳩も多く……。)

「内面の状態」

- 「素敵なお昼をごちそうさま。とてもおいしかったわ」
- 腸閉塞だった。しかも、かなり危険な状態だったらしい。
- 行政の裁量とされてきた地方債の発行を違法とする判決はきわめて珍しい。
- 남녀간의 우정은 결혼 후에는 유지되기가 매우 어렵다.
(男女間の友情は結婚後には非常に維持し難い。)
- 나에게 시골이란 말은 고향과 거의 같은 뜻을 지니고 있었다.
(私にとって田舎という言葉は故郷とほとんど同じ意味を持っていた。)

「人の様子・性格・態度」

- 「だってぼくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人でこわくないから行って習えと云ったよ。」と云いました。
- さほど謙虚でない私にもその気持はよくわかる。
- 내 자신이 몹시 초라하고 부끄럽게 느낄 때가 있다.
(私自身がとてもみじめで恥ずかしく思うときがある。)
- 아빠는 아주 점잖은 사람입니다. 게다가 시인이구요.
(パパはとても優しい人です。それに詩人です。)

(3)コト・モノに対する感情

4.2 で検討した感情形容詞は話者自身の感情を直接表現するものであるが、ここに取り上げる形容詞はモノ・コトの状態・特性を外から見て生じる感情を表すものである。したがって、客観的な性状・特性記述の側面と主観的な感情記述の側面とを併せ持つ。この種の形容詞と強意語との共起の状況は次の通りである。

A : とても類①／아주類①、きわめて類／극히類、少し類①／조금類、

本当に類／정말類、かなり類／상당히類、最も類／가장類、
だんだん類／점점類、もっと類／더類

B：大いに類／다類、確かに類／분명히類、 극히類、ほとんど類／거의類、
一向類／전혀類、さほど類／별로類、とても類②／아주類②

感情形容詞の場合と同様に《本当に類／정말類》《とても類①／아주類①》が多く使用される。特に、感謝や謝罪の気持ちを表すためには、《本当に類／정말類》が「ありがたい」「申し訳ない」などの前に多く来ている。

○「天道というものはありがたいもんだ。春は赤く夏は白く秋は黄いろく、秋が黄いろになると葡萄は紫になる。実にありがたいもんだ。」

○「本当にありがとう。父親のこと……」

○“니 마음이 참 고맙구나, 상혁아.”(あなたの心が本当にありがたいね、サンヒョク。)

○“진짜 미안해...”(本当にごめんなさい……)

○「いやこんにちは。お招きにあずかりまして太へん恐縮です。」と云いました。

○五年、十年とつづけてひとつの健康法を実行していただけることは、とても幸せなことだ。

○머리를 닦기에는 턱도 없이 얇고 작은 손수건이지만 무척 감격스러웠다.

(髪の毛を乾かすには薄っぺらで小さなタオルだったが非常にありがたかった。)

また、《極めて類／극히類》の中でも、日本語では「極めて」、韓国語では「심히」が他の語より感情的な表現によく使われる。

○「我々は中国の為替制度改革の速度が遅く失望させていることに、きわめて不満足だ」。

○日本外交を麻生氏に委ねるのは、極めて心配だ。

○또 아이는 심히 걱정스러운 낯으로 말하곤 했다.

(またその子は大変心配そうな顔で話したりしていた。)

その他に、比較の程度を表すグループでもよく見られる。

○やさしい女房は「いざとなったら、趣味と実益をかねて一晩に五万円くらい稼いであげるから心配しないで」と言う。ますます心配だ。

○髪の毛の抜け毛も増えたと言った。それが一番嫌だと言っていた。

○정수는 심부름 가운데 술 심부름이 제일 싫었다.

(ジョンスはお使いするなかでお酒の使いが一番嫌いだった。)

○그러나 지금의 안보환경은 훨씬 불안한 상태다.

(しかし、今日の安保環境はさらに不安な状態だ。)

4.5 第4節のまとめ

強意語と形容詞の共起の状況に関する以上の考察の結果をまとめると次の表のようになる。ここでは、縦軸に内的状態か外的状態かの別をとり、その下位に感情、感覚、属性の3つの下位分類を置いた。横軸には主観的か客観的かを取った。

	形容詞	主観的 ←-----	-----→ 客観的
内的状態	感情	とても類①／ 아주類① 本当に類／정 말類 少し類①／조 금類①	かなり類 かなり類／ 상당히 類 最も類／ 가장類 더類①
	感覚 (温度・体)		
外的状態	物事に対する感情	少し類② ／ 조금類 ②	だんだん 類／ 점점 類 きわめて類／극히 類 大いに類／다類 確かに類／분명히 類 ほとんど類／거의 類 さほど類／별로類 一向類／전혀類
	物事の物理的側面	とても類 ②／아주 類②	もっと類 ／ 더類
	物事に対する程度・評価		

5. 終わりに

本稿では日本語と韓国語の強意語と形容詞との共起の様相を実例に基づいて考察した。形容詞を「感情形容詞」「感覚形容詞」「属性形容詞」に分け、強意語をいくつかの類に区分して、各々共起関係を調べた。分析の結果、その共起の様相は日韓両言語間でよく似ていることが確かめられた。主観的である直接感情形容詞の程度の表現には《とても類①／아주類①》《本当に類／정말類》《少し類／조금類》が主として用いられる。《かなり類》《最も類／가장類》を用いると客観的な側面が強くなる。感覚の程度に関しても両言語とも感情の程度の場合と似たような状況であった。物事の属性に関しては、物理的な側面と感情的な側面には若干共起制限が見られるが、多様な強意語との共起の可能性が見られた。

本稿では、強意語と形容詞の共起状況について概略的なことを把握することとどまっている。しかし、両言語間のより精細な強意語の使い方を見るためには、本稿で下位分類した強意語間の細部考察が欠かせないと思う。これについては今後の課題としたい。

注

- 1 本稿では、資料調査から拾い出した強意語が何回出現してもすべて1語と考えて、異なるものだけを数えて「異なり語数」として扱うことにする。
- 2 本稿で形容詞と共起関係が見られなかった強意語には以下のようなものがある。
日本語：せいぜい、たった、いやに、ごまんと、さっぱり、十分に、山ほどなど
韓国語：대충, 대개, 고작, 기껏, 정, 몽땅, 곧잘, 한껏, 마음껏, 실컷, 단연など
これらの語には程度性と一緒に量性または様態性の意味特徴が有り、そのために形容詞以外の品詞だけと共起するとも考えられよう。
- 3 韓国語の「있다」「없다」は通常「存在詞」として品詞区分され、形容詞とは区別される。しかし、「있다」「없다」を含む「맛있다」(美味しい)、「재미없다」(つまらない)などの複合語は、意味的に形容詞との共通性が大きい。したがって、本稿ではこれらを形容詞として扱うことにする。
- 4 下位区分は、意味内容と用例から見られた共起様相をもとにして行う。
- 5 例文の出典は3.2に示した調査資料である。出典の個別表記は省略する。

主要参考文献

- 工藤 浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院 pp. 176-198
 佐野由紀子 (1997) 「程度副詞の名詞修飾について」『大阪大学日本学報』16号
 大阪大学文学部日本学研究室 pp. 121-132
 丹保健一 (1975) 「「程度副詞」＋「動詞」の意義構造」『国語学研究』14
 東北大学文学部国語学研究刊行会 pp. 62-69
 丹保健一 (1979) 「程度副詞の体言修飾について」『文芸研究』92 日本文学研究会
 pp. 50-59
 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
 森山卓郎 (1985) 「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会』20 pp. 137-140
 김 정남 (2005) 『국어 형용사의 연구』도서출판 역락
 손 남익 (1995) 『국어부사연구』박이정
 李 忠雨 (1986) 「국어 정도부사의 동사수식에 대하여」『국어학논문집 24집』
 서울대 사범대 국어국문학 연구회
 최 흥렬 (2005) 『정도부사의 유의어 연구』도서출판 역락